The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	毛能波と氐尓乎
Author(s)	蔦, 清行
Citation	日本語・日本文化. 2012, 38, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6781
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

毛能波と氏尓乎

蔦　清行

○

萬葉集に次の二首の歌があることは、夙に注目されている。

(1)　霍公鳥（ほととぎす）　今来鳴きそむ　あやめぐさ　かづらくまでに　離（か）るる日あらめや　毛能波三箇辞闕之　（巻十九、四一七五）

(2)　我が門ゆ　鳴き過ぎ渡る　霍公鳥（ほととぎす）　いや懐かしく　聞けど飽き足らず　毛能波氏尓乎六箇辞闕之　（巻十九、四一七六）

歌の大意はそれぞれ、「ホトトギスは今来て鳴き始めた。あやめ草を鬘にするまでにここを離れてしまう日があろうものか」「我が家の門の前を鳴きながら通り過ぎてゆくホトトギスは、ますます心惹かれて、いくら聞いても満足しない」（以下、歌の大意は、特に注記のない限り『新大系』による。また本稿では、萬葉集の用例は、巻数と歌番号（旧編国歌大観番号）のみを掲げる）といったものである。

しかしこの歌が注目されてきた理由は、歌の内容にではなく、その脚注にあった。「毛能波三箇辞闕之」「毛能波氐尓乎六箇辞闕之」という注記は、後人の付したものではなく、萬葉集の成立当時からあったものと考えられている。これらは「モ・ノ・ハの三つ（モ・ノ・ハ・テ・ニ・ヲの六つ）の《辞》を欠いている」という意味であり、そこに、作歌者の、あるいはより広く当時の人々の、自らの用いる言葉に対する意識が垣間見られることが、指摘されてきたのであった。その指摘の一例として、亀井孝他編『日本語の歴史』の記述を引用する。

「辞」はシナ語の文法上の用語のひとつで、それを日本語のうえに応用したものと考えると、この二つの歌の注は、けっきょく、日本語の助詞六つについて、《万葉集》の編者が（ここでは大伴家持であろう）、かなり明確な意識をもって臨み、それらをとくに、用いない技巧を発揮したものであることを主張したのであろう。あるいは、この歌をつくってみた結果、それぞれの場合に助詞の幾種かを用いなかった点に気づいて、感興をおぼえたというのかもしれない。いずれにせよ、他の品詞に対して助詞を区別できたこと、助詞をすくなくとも六種までは確かに認めていたこと、また、それらを用いないことが注目すべきことであるということ、この三点を明示しえたのは、すでに、西欧語の場合にいう、形態素――日本語では、シナ語の例にならって関係辞――について、客観的にみるだけの余裕をもっていたことの証拠になる。　（第二巻「文字とのめぐりあい」二四五～六頁）

本稿もまた、右のような見解に、基本的に賛同する。ただし本稿ではさらにもう一点、付け加えたい理解がある。それは、この注記が、《辞》を二つあるいはそれ以上に区分することを、当時の人々が知っていたことを明示しているのではないかということである。その区分があったこと、そしてそれがどのような区分であったのかを明らかにすることが、本稿の課題である。

一

さて、当該の注記を記した人物は、どのような基準で三つあるいは六つの《辞》を選んだのであろうか。これまでの研究の多くは、使用頻度の高い助詞が選ばれたのだ、と考えてきた。管見の限り、それをもっとも詳しく説明するのは『大系』（四一七五番歌頭注）である。その記述を確認しておきたい。

助詞のモ・ノ・ハの三つの言葉を、この歌は含んでいないというのである。これは偶然の結果ではなく、大伴家持がこの三つの言葉を含まない歌を作ろうとした結果と思われる。モ・ノ・ハという助詞は、助詞の中でも使用度数の極めて多いものに属する。万葉集での、助詞の使用度は赤間淳子氏の調査によれば、ノ五一八五、ニ二七三一、ヲ一九七三、ハ一八四三、テ一五五九、モ一四五一、バ一四一八、ガ九九七、ト九三九、カモ六八五、ソ四二〇、ヤ三六八、カ三六四、コソ三一九、ド二九四、トモ二三〇、ドモ二〇九（補読の場合は算入せず）となっている。これによれば、この歌で欠くとした、モ・ノ・ハと、この次の歌で欠くとしたモ・ノ・ハ・テ・ニ・ヲは、助詞の中で最も使用度数の多いものであることがよく分かる。当時の宣命の書き方などを見ても、助詞や助動詞は特別に小さく書いてあり、それらが、使用度の上でも大きく、また、中国語との相違を明らかに示すものであることが、認識されていたことを示している。大伴家持も、その点に関心をもっていたので、わざわざこのような歌を作ってみたのであろう。

（第四巻三三三～四頁）

これによれば、萬葉集での助詞の使用頻度は、高い方から順にノ・ニ・ヲ・ハ・テ・モ…と並ぶことになる。それは順序を入れかえれば当該六箇辞「毛能波氐尓乎」に一致するから、これら「六箇辞」が使用頻度によって選ばれたという説明は、一定の説得力を持つ。しかしもしも使用頻度という基準を徹底するならば、なぜ「三箇辞」「六箇辞」

がそれぞれ「ノ・ニ・ヲ」「ノ・ニ・ヲ・ハ・テ・モ」でないのか、という疑問が新たに生ずるように思われる。そしてこの疑問には、使用頻度という観点から答えを与えることはできないであろう。もちろん、『大系』所引赤間氏の調査は補読を算入しないものではあるが、たとえその補読の場合を含めても、用例数が逆転してモ・ノ・ハ・テ・ニ・ヲの順に並ぶとは思われない。しかも、使用頻度という基準は、この問題を考えるのには、そもそも適さない面を含むように思われる。というのは、当該注記を付したであろう家持が、萬葉集における、あるいは上代の言語一般における《辞》の使用頻度を、正確に把握していたとは思えないからである。実際に選ばれた六つの《辞》は、使用頻度の高い助詞に確かに一致しているものの、それはあくまで偶然の結果であって、選択の基準はもっと別のところにあったのではなかろうか。

右に『大系』における当該歌の頭注を引用したが、ここでさらに、『全集』『釋注』の説明に注目したい。なお、引用中の傍点は引用者によるものである（以下同じ）。

歌に多く使われる三つの助詞モ・ノ・ハをあらかじめ使用しないように制限して作った歌。次の歌にはさらにテ・ニ・ヲをも加えてあるが、この歌もテ・ヲを含んでいない。（『全集』四一七五番歌頭注、第四巻三一一頁）

第二首（引用者注、四一七六番歌）は、第一首の結句「離るる日あらめや」を受けて歌い起こしている。省く助詞の数を二倍にして、いっそう厳しい条件を課してうたっている。ただし、第一首でも、第二首にいう「て・に・を」のうち「て・を」を使っていない。これは、第一首で「も・の・は」を省くことに意識を注いだ結果、偶然そうなったものであろう。家持の意図は、第一首では「も・の・は」を省くことにもっぱら注がれたのであるらしい。（『釋注』第十巻一二四～五頁）

これらの注釈においては、第一首「霍公鳥（ほととぎす）　今来鳴きそむ　あやめぐさ　かづらくまでに　離（か）るる日あらめや」の

歌の中には、四句目「かづらくまでに」の部分にニが用いられてはいるものの、テ・ヲが含まれていない、という事実が指摘されている。言わば第一首四一七五番歌は、「毛能波氐乎五箇辞闕之」（モ・ノ・ハ・テ・ヲの五つの《辞》を欠いている）ものなのである。ところが脚注で言及されているのはあくまでも「毛能波三箇辞」にとどまり、テ・ヲについては何ら触れられていない。なぜなのだろうか。右の『全集』『釋注』では、そのことの理由や意義についてまでは、記されていない。『釋注』は「家持の意図は、第一首では「も・の・は」を省くことにもっぱら注がれたのであるらしい」と述べるが、ではなぜ家持はそこに専ら注意を払ったのであろうか。

やや遠回りになるが、ここで、注記にある「闕之」の意味を確認しておきたい。諸注釈においては二様の解釈が提出されている。一つは、歌を作る際の制約として三つまたは六つの《辞》を使わないことを決めたという解釈であり、契沖以下殆どの注釈書で採られているものである。もう一つは、先に引用した『日本語の歴史』などに見られる、「この歌をつくってみた結果、それぞれの場合に助詞の幾種かを用いなかった点に気づいて、感興をおぼえた」（前掲）とする解釈である。しかしこの後者の解釈については、やや注意を必要とする。『全集』『釋注』が指摘するように、「毛能波三箇辞闕之」という注の付いた四一七五番歌は、実際にはさらにテ・ヲの《辞》をも欠いているからである。もしも歌を作った後に特定の《辞》が使用されていないことに気付いたのであれば、当然、「五箇辞闕之」というような脚注が付けられたはずであろう。従ってこの注は、歌を作る際の前提であった可能性が高い。また、もしも歌を作った後に気付いたにもかかわらず「五箇辞」ではなく「三箇辞」という注記にとどめたとすれば、それは、「毛能波三箇辞」というまとまりが、当時の人々に共通の枠組みとして既に存在していたということでなくてはならないはずである。

今述べた、「毛能波三箇辞」というまとまりがあらかじめ存在していた、とする考え方は、この注記が作歌の前提であった場合にも、有効ではないだろうか。前提があくまで三つの《辞》にとどまっていても、四一七五番歌が完成したときには、《辞》に対する特別な興味を持っている作者のこと、必ずやそれがテ・ヲの《辞》をも欠いていることに気づいたであろう。少なくとも「毛能波氐尓乎六箇辞闕之」歌たる四一七六番歌と比べてみたときには、気づく

に違いない。そして「毛能波三箇辞闕之」は「毛能波氐乎五箇辞闕之」へと改められたはずである。ところが実際にはそうはなっていない。四一七五番歌は、あくまでも「毛能波三箇辞闕之」歌なのである。なぜか。これは、三という数字が、臨時に思いついて付けられたものではなく、既に区分されまとめられたものであったためと考えるよりほかないであろう。そしてそれが既存の枠組みであったからこそ、歌を作る際の制約として機能し得たのではなかろうか。しかもこのことは、第二首四一七六番歌の「六箇辞」についても、同様に考えられよう。同じ論の繰り返しになるのでごく簡単に説明するが、当時《辞》は、ガやトなど、モノハテニヲ以外にもいくつも存在していたはずである。四一七六番歌にはそれらの《辞》も含まれていないが、注に記されているのは「六箇辞」にとどまっている。それは、六という数字が、何らかの基準によってあらかじめ限定されたものであるからだと考えられるのである。そして以上を総合すれば、モノハとテニヲとが、当時の人々にはそれぞれ別々の群として認識されていた、という結論が導かれるのではなかろうか。

このような考え方は、先行研究でも提示されてきたものである。たとえば『品詞別日本文法講座　助詞』は、「これが「モノハ」「テニヲ」と三箇の辞が各一群であるように見える点については、従来ヲコト点の関連から注意されてきた」（二九頁）と述べているし、中田祝夫氏『古点本の国語学的研究　総論篇』には「二首ともに闕辞が、モ・ノ・ハの順序となり、つぎにテ・ニ・ヲと三箇づつに整理されてゐることは、従来注目されてきた」という記述（一八八頁、頁数は改訂版による）が認められる。本稿の考え方も、基本的には、これらと大きく相違するものではない。

ただこれらの研究においては、本稿で今確認したような、第一首四一七五番歌にテ・ヲが用いられていないことなどは強調されていない。そのため、モノハとテニヲとが各一群であるか否かも、さまで厳密には追求されていない。先の『品詞別日本文法講座』が、傍点を施したように、「三箇の辞が各一群であるように見える」と留保を設けた記述をせざるを得なかったのも、そのためと考えられる。それに対して本稿では、『全集』『釋注』が指摘するようなテ・ヲの不使用から、モノハとテニヲとが各々一群と見られていたことがほぼ確実に結論づけられることを、強調し

たいのである。

また、いずれの記述も、ヲコト点との関連に言及しているものの、具体的にどのような関連を有するのかという点については、はっきりした関連を示す実例が見つからないことから、明確にしていない。本稿の筆者も、管見により、ヲコト点の体系でモノハとテニヲとを二群に区別するようなものがないかどうか調査してみたが、そのようなものを見つけることはできなかった。この方面での調査は今後も継続されるべきと考えるが、今は深く立ち入ることを避ける。それとはやや異なる視座から、これらモノハとテニヲとの二つの群が区分される基準を、考えてみたいのである。

二

あらかじめ結論に近いことを述べておくと、本稿では、モノハとテニヲとが二つの群に区分される原理は、これらの《辞》の有する機能の差にあったのではないかと主張する。具体的に言えば、モ・ノ・ハが一つの句の中でのみ用いられるのに対し、テ・ニ・ヲは二つの句を接続する場合にも用いる、という機能の差によって区分されているのではないかと考えたいのである（なお、ここでは「句」という用語を、便宜上、山田孝雄の用いるのと同じ意味で用いる）。

これをもう少し詳しく説明するためには、まずテ・ニ・ヲの方に注目することが便宜であろう。これらはいずれも、接続助詞的に用いられるという共通点があるように思われるのである。そのような用法の例を一例ずつ挙げておく。

(3) 夕に会ひて（暮相而）　朝面無み　名張にか　日長き妹が　廬せりけむ　（巻一、六〇）

(4) 大和恋ひ　眠の寝らえぬに（寐之不所宿尓）　心なく　この渚埼廻に　鶴鳴くべしや　（巻一、七一）

(5) 風流士と　吾は聞けるを（吾者聞流乎）　宿貸さず　吾を帰せり　おその風流士　（巻二、一二六）

念のため口語訳を付すと、「宵に逢い、翌朝は恥ずかしくて「なばる（隠れる）」という名の名張（なばり）の地に、旅に出て久しい妻が仮の宿りをしていたことだろうか」「大和を恋しく思って眠ることができないのに、思いやりもなく、この洲崎のあたりで鶴が鳴いてよいものであろうか」「風流の士と私は聞いていたのに、泊めてもくれないで私を帰しました、鈍い風流の士よ」といったものである。口語訳の中で接続の意を担っている部分に傍点を施しておいたが、それ以上の説明は不要であろう。これらの例には二つの句の接続が含まれており、テ・ニ・ヲはその接続を表すのに用いられているのである。

これに対し、モ・ノ・ハには、そのような接続助詞としての用法は基本的に認められない。それらはあくまで一つの句の内部ではたらくにとどまるのである。そしてそこにこそ、モノハとテニヲとが、その各々にあっては一つの共通の群に包含され、互いに対照するときには二つの異なった群に区分される契機があると考えたいのである。

もちろん、この考え方はあくまで仮説であり、積極的な根拠を持つものでないことは、ここではっきりと断っておかねばならない。

しかしこのように考えることによって、たとえば、モノハとテニヲとのうちモノハの方が先に提示されている、という順序の問題も、説明が可能となるように思われる。すなわち一つの句の中でのみ用いられるモノハの方が基本的な《辞》と認識されて第一番目を占め、二つの句を接続するテニヲはその後に配されている、と考え得るのである。

ただし、以上のような仮説を提示する上で、二点ほど、解決せねばならない問題が存在している。それは、モノハのうち、モ・ハにも二つの句を接続する用法があるのではないか、という問題である。以下、モ（二・一節）とハ（二・二節）に分けて、順に検討することにしたい。

二・一

接続助詞的な用法のモは、辞書などの記述では、多くの場合、平安時代以降に成立したものと考えられている。たとえば日本国語大辞典（第二版）に挙げられる用例は源氏物語橋姫巻のものが最も古いものであるし、日本語文法大辞典では「鎌倉・室町時代には逆接の接続助詞として用いられる「も」があり、早くは平安時代にその例が認められる」（「も」の項、七八二頁三段目、野村剛史氏ご執筆）と説明されている。ただ萬葉集における次の用例は、接続の意味を担うようにも解釈でき、注意を要するであろう。

(6)　来むと言ふも（将来云毛）　来ぬ時あるを　来じと言ふを　来むとは待たじ　来じと言ふものを
（巻四、五二七）

「来ようと言っても来ない時があるのに、初めから来ないと言うのを来るだろうと待つことはいたしません。来ないと言うものを」という、半ば戯れに詠まれたとも解される歌である。「来むと言ふも」の部分が、逆接条件的な意味を持っているように見え、モが接続助詞的に用いられているのではないかと疑われるのである（山口堯二氏（『古代接続法の研究』三〇頁）がこの見解をとっておられる）。

このようなモについては、〔用言連体形＋モ〕の形式全体に視野を広げて考えたい。次に二つ例を挙げる。

(7)　吾が心　焼くも吾なり（焼毛吾有）　はしきやし　君に恋ふるも（君尓戀毛）　吾が心から（巻十三、三二七一）

(8)　…まつろはず　立ち向かひしも（立向之毛）　露霜の　消なば消ぬべく　行く鳥の　あらそふはしに…
（巻二、一九九）

(7)は「私の心を焼くのも私だ。いとしいあなたに恋するのも私の心ゆえです」のような大意を持つ。ここでは「焼くも」「恋ふるも」いずれも、逆接を表しているのではないことは明らかであろう。用言連体形を用いた「焼く」「恋ふる」は、いずれも「焼くもの」「恋すること」のような、体言に準ずるはたらきを託されており、モはその体言相当の連体形に下接しているのである。(8)もおおむね同様に考えてよかろう。「立ち向かひし」の表すのは、より具体的なもの、たとえば「従わずに手向かっていた敵」のようなものであって、やはりモが逆接を表すのではないことが明瞭である。

これらの用法は、通常の係助詞としての用法と基本的に同じものであり、ただそれが用言連体形を用いた体言相当句を承けているに過ぎない。萬葉集には連体形に接続する文中用法のモが一〇例見られるが、(6)（「来むと言ふも」）を除く残り九例全てにおいて、(7)(8)と同様、文法的には体言相当句にモが接していること、意味的にも逆接を表すのではないことが確認できた。従って(6)の「来むと言ふも」も、意味上は「来ようといっても」のような接続表現に解することが可能であるものの、「来ようという場合にも」「来ようというときにも」のように、「来むと言ふ」という体言相当句にモが下接していると理解しておくのが穏当ではなかろうか。この例からだけでは、上代語のモに接続助詞的なはたらきを認めるには及ばないように思われる。

二・二

続いて、ハを用いた接続表現と見られるものについても検討する。具体的には、次の(9)・(10)のような、〔形容詞連用形ク＋ハ〕・〔打消助動詞連用形ズ＋ハ〕という形式（以下それぞれクハ・ズハと略す）を持つものである。

(9)　わが背子は　仮廬作らす　草なくは（草無者）　小松が下の　草を刈らさね　（巻一、一一）

(10)　君が家に　吾が住み坂の　家道をも　吾は忘れじ　命死なずは（命不レ死者）　（巻四、五〇四）

それぞれ「我が背子は、仮小屋をお作りになる草（かや）がなかったら、松の木の下の草（くさ）をお刈りなさいな」「あなたの家に私が住むという住坂を越えて通う家路を私は忘れまい。命のある限りは」といった大意の歌である。「草（かや）なくは」「命死なずは」の部分が仮定条件表現となっているのであるが、ハがその仮定条件を表す接続助詞として用いられていると解釈される。そして仮にそう考えると、接続助詞的な用法をもたない《辞》の群の中にハを含めることが、困難になってしまうのである。

ここでは、クハ・ズハの担う意味が仮定条件であるということに注意を要する。渡辺実氏は、現代語の接続表現について、先行する部分と後続する部分との関係が、一般にはかなりはっきりした独立性の意識されるものである、と述べておられるが、その中でやや特殊なものとして仮定条件表現を挙げておられる。

ただ仮定条件の場合には、時間的接続の場合と同様に、先行叙述内容は後行叙述内容の成立背景の一種とも見られる一面を持ち、したがって仮定条件の接続展叙には連用展叙に近い性格があり、そのために仮定条件における先行叙述内容は、後行叙述内容から独立したものと意識されるよりは、むしろそれに依存するものと意識される可能性が生じよう（以下略）　（『国語構文論』二八二頁）

仮定条件表現が連用修飾に近い性質を持つこと、そしてそのために仮定条件を表す先行要素が帰結を表す後行要素に対して依存的であること、本稿にとってはこの二点が重要である。渡辺氏の論では、その独立性の強さは、先行要素の内部で係助詞ハが用いられ得るか否か、という点などから判定される。ハは文末の用言と結びつく傾向がきわめて強く、従って逆にハを承ける用言はその部分で文を終止させる傾向が強い。つまり、先行要素の内部でハが用いら

れるということは、その先行要素が独立した一つの文に近い性格を持つと解釈されるのである。逆に、先行要素の内部にハが現れないとすれば、それはその先行要素の独立性が弱く、後行要素に対する従属性が強いことを示唆するはずである。

この考え方は、本稿の場合にも有効であるように思われる。萬葉集にはクハが十八例、ズハが六十四例認められる（ズハは、佐佐木隆氏（『萬葉集と上代語』所収「〔――ずは――。〕の構文」）のご調査による）のであるが、そのうち仮定条件を表す先行句の中でハが用いられる例は、一例も存在しないのである。仮定条件を表す句は、それだけ、後続句に従属したものと言えるであろう。

(11)　いつまでに　生かむ命そ　おほかたは（凡者）　恋ひつつあらずは（戀乍不レ有者）　死ぬる勝れり

（巻十二、二九一三）

たとえば(11)の場合、「おほかたは」が直接に修飾しているのは「死ぬる勝れり」の部分であって、その「おほかたは死ぬる勝れり」という句に対して、「恋ひつつあらずは」という仮定条件句が挿入されていると解せねばならないであろう。先に挙げた(9)の「わが背子は仮廬作らす草なくは小松が下の草を刈らさね」という句に対して、「仮廬作らす草なくは」という仮定条件句が挿入されていると解される。仮定条件表現よりも先行する部分にハが位置しているにもかかわらず、そのハは仮定条件句の内部に含まれてはいないのである。仮定条件表現においては、先行句の独立性が弱く、従ってその内部にはハが現れ得ないのだと解釈されよう。渡辺氏のご指摘の通り、これら仮定条件句はいずれも、後続句に対する従属性の強い、連用修飾的な表現に共通する面を持つのである。そのことは、これらの表現が、形式上、〔形容詞連用形ク＋ハ〕・〔打消助動詞連用形ズ＋ハ〕と、連用修飾の意を担うことを主たる機能とする連用形を用いることも、傍証としてよいと思われる。

さて、以上のような仮定表現に用いられるハの性質は、テ・ニ・ヲの性質とは際だった対照を見せるように思われる。次に挙げる⑿～⒁は、テ・ニ・ヲを用いて二つの句を接続するものであるが、その先行句内部にハが用いられるものである。

⑿　大夫の　心はなくて（心者無而）　秋はぎの　恋のみにやも　なづみてありなむ　（巻十、二一二二）

⒀　春の雨は　いやしき降るに（春之雨者　弥布落尓）　梅の花　未だ咲かなく　いと若みかも　（巻四、七八六）

⒁　会はむ夜は　いつもあらむを（将レ相夜者　何時将レ有乎）　何すとか　その夕会ひて　言の繁きも　（巻四、七三〇）

テ・ニ・ヲを用いた接続表現においては、二つの句の独立性が強く、そのゆえに先行句の内部でもハが用いられ得るのであろう。

このように、仮定条件が、接続よりもむしろ連用修飾に共通する面を持つとすれば、クハ・ズハにおけるハは、一つの句の中で種々の連用修飾要素に下接するハと、本質的には変わらないものだと言わねばならない。たとえば⑼「わが背子は仮廬作らす草なくは小松が下の草を刈らさね」の場合であれば、「仮廬作らす草なくは」を、「わが背子は……小松が下の草を刈らさね」という一つの句の中にさらに付け加えられた連用修飾句とも見得るのである。もちろん「仮廬作らす草なくは」と「わが背子は小松が下の草を刈らさね」とは、それぞれ別個の一つの句であることは否定できない。しかしその相互の独立性は弱く、結果的に両句が一つのことがらを表す単一のまとまりだと解釈される余地もあったのではなかろうか。少なくとも、テ・ニ・ヲを用いた表現と比較するときには、そのような傾向が強かったと考えて大過ないであろう。

ここまで、接続の機能を持つと見られるモ・ハについて、その実際の性質を検討してきたが、それらがテ・ニ・ヲ

の持つ機能とは異なっていること、少なくともそのような見方が可能であることが確認できた。モ・ハとテ・ニ・ヲとを、機能面から二つの異なる群に属せしめる考え方は、依然として有効であるように思われる。つまり、モ・ハ（・ノ）は同じ一つの群、すなわち一つの句の中でのみはたらく群として認識され、テ・ニ・ヲはそれらとは違った別の群、すなわち二つの句を結びつけるはたらきをなし得る群として認識されていたのではないか、と考えられるのである。

三

本稿では、萬葉集四一七五・四一七六番歌の「毛能波三箇辞闕之」「毛能波氐尓乎六箇辞闕之」という注記について、そこに当時の《辞》の区分が反映していることを明らかにした。その上で、モノハとテニヲとを区分するその基準が、二つの句の接続に用い得るか否かという機能的な面に立脚するものなのではないか、という仮説を提示した。

繰り返すが、これはあくまで一つの仮説であるし、モノハとテニヲとの違いを以上のような接続の機能に求めることは、近代的な文法の体系から考えれば、困難と言わざるを得ない。しかしこの注記を付したであろう大伴家持は、あくまで上代の人であり、近代的な文法体系と全く同じ考え方を持っていたわけではない。上代の人々は彼らなりの方法でこれらの《辞》の機能を解していたであろうし、当然ではあるがそこには彼らなりの方法しかあり得なかった。我々はただ、その区分された結果から、区分の原理を推測するよりないのである。

ただもしも、本稿に示した仮説が正しいとすれば、彼らが、一つの文が単一の句から成るのかそれとも複数の句から成るのかということについて、重大な関心を抱いていたということは言い得るであろう。その意味で本稿は、萬葉集に示された二つの注記に、それを記した人々の心の反映を見ようとする試みでもあったのである。

引用に用いた文献は以下の通り（萬葉集からの用例は、読解の便のため、注目部分以外は『萬葉集訳文篇』（佐竹昭広・木下正俊・小島憲之、塙書房、一九七二年）を参考に適宜表記を改めた）。

萬葉集　『萬葉集本文篇』（補訂版）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之、塙書房、一九九八年（旧版は一九六三年）

萬葉集の注釈書を示すのに、本文中では以下の略称を用いた。

新日本古典文学大系『萬葉集　一～四』佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之、岩波書店、一九九九年～二〇〇三年　…『新大系』

日本古典文学大系『萬葉集　一～四』高木市之助・五味智英・大野晋、岩波書店、一九五七～一九六二年　…『大系』

日本古典文学全集『萬葉集　一～四』小島憲之・木下正俊・佐竹昭広、小学館、一九七一～一九七五年　…『全集』

『萬葉集釋注　一～十』伊藤博、集英社、一九九五～二〇〇〇年　…『釋注』

参考文献（本文中に引用したもののみ）

『日本語の歴史　2　文字とのめぐりあい』亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編、平凡社、一九六三年

『品詞別日本文法講座　9　助詞』鈴木一彦・林巨樹編（当該項目は京極興一氏ご執筆）、明治書院、一九七三年

『古点本の国語学的研究　総論篇』中田祝夫、勉誠社、一九五四年（一九七九年改訂版）

『古代接続法の研究』山口堯二、明治書院、一九八〇年

『国語構文論』渡辺実、塙書房、一九七一年

『萬葉集と上代語』佐佐木隆、ひつじ書房、一九九九年

〔付記〕

ヲコト点との関わりについては、大槻信氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

本稿成稿後、新沢典子氏「ものはてにをを欠く歌の和歌史における位置づけ」（第三十五回萬葉語学文学研究会口頭発表、二〇一二年一月九日、於大阪府立大学）を拝聴する機会を得た。当該注記の「辞」が必ずしも「助辞」を意味するわけではない、という氏の主張には首肯される点が多く、それによって記述を改めた部分がある。学恩に感謝申し上げる。

〈キーワード〉萬葉集、上代語、文法、助詞、「辞」

Old Japanese particle *mo/no/ha* and *te/ni/wo*

Kiyoyuki TSUTA

Manyosyu No.4175 and No.4176 songs are known as songs that don't have particles *mo/no/ha* and *mo/no/ha/te/ni/wo*, from its footnote.

These footnotes show us that those particles could be divided into two groups, one of which is *mo/no/ha*, and the other of which is *te/ni/wo*.

These groups are supposed to be divided by their functions. *mo/no/ha* are used only in a single clause, while *te/ni/wo* are used between two clauses.

mo/no/ha are though sometimes used between two clauses, but their usage are completely different from *te/ni/wo*. So this fact doesn't influence to this paper, whose point is that *mo/no/ha/te/ni/wo* could be divided into two groups.